

# 我が国における子どもの歌の多様性について — 明治時代からの変遷（2） —

## A Study of the Variety of Children Songs in Japan — Change of Music Style Since Meiji Period (2) —

(2008年3月31日受理)

小野 文子 津上 崇  
Ayako Ono Takashi Tsugami

Key words : 子どもの歌, 唱歌, 音階, 和楽, 洋楽

### 要 旨

日本の代表的な歌として、欧米の人々にも知られる「さくら」と「荒城の月」。これらは名曲として、今もなお音楽教科書や歌曲集により私達に親しまれている。そのうちの「荒城の月」の作曲家としてされ 明治期における代表的な音楽家の一人、瀧廉太郎の唱歌や声楽曲を分析検討することで、西洋音楽との融合、芸術性のある歌の誕生についてみていく。またそれ以後の「子どもの歌」にもどのような影響を及ぼしたかを調べる。

### はじめに

前稿「明治時代からの変遷（1）」では、金田一春彦等編「日本の唱歌」〔上〕より明治期初期のわが国の「子どもの歌」について取り上げた。明治5年、学校制度の制定により、全国に小、中学校の設置が定められ、下等小学教科14科が制定された。その中で最後に挙げられた「唱歌」すなわち歌唱なる教科には注意書きとして「当分之を欠ク」と言う言葉が付け加えられている。要するに一応教科として位置づけられていながら、実際には授業科目としては差し当たっては置かれていなかったことが理解されるのだ。<sup>1)</sup> その理由は基本的知識や技能の獲得のための教育が優先であったこと。そして何よりも西洋音楽教育を実現できる人材が皆無であった。国は明治12年、音楽取調掛を設置し洋楽の普及発展を行ったことは前稿で述べた。まずは唱歌集の製作であり、唱歌教育を推し進める教員の育成であった。最初に取り組んだ『小学唱歌集・初編』には多くの旋律が欧米の曲に日本語歌詞を“無理にはめこんだ”ぎこちない歌が多かった。前稿での分析から見られるように、音は単純な反復進行か

らオクターブ内に音が増え、調もハ長調からシャープやフラットが付き、拍子は4/4、2/4から3/4、そして6/8へと多様化している。その後の明治16年には『幼稚園唱歌集』が刊行される。明治時代、正式な日本語は文語体で、今の口語体は俗語と呼ばれていたもので、はじめのころは『幼稚園唱歌集』といえども文語体であった。これは唱歌を通じて語彙や表現を教えようという配慮も働いたようだ。<sup>2)</sup> また音楽取調掛のもう一つの目的である、教員の養成では、日本の洋楽黎明期を牽引した音楽家たち、幸田延、幸田幸の姉妹（後に東京音楽学校教授）や瀧廉太郎などが巣立っている。日本歌曲の第1号であり、初の邦人作の合唱曲でもある『花』を作曲した瀧廉太郎に焦点を当てながら、彼の作品から読み取れる「子どもの歌」「日本歌曲」を見ていく。分析に当たっては小長久子編『瀧廉太郎全曲集〔作品と解説〕』に沿っておこなう。<sup>3)</sup>

## 1 瀧廉太郎における「子どもの歌」「声楽曲」の分析

『瀧廉太郎全曲集』には日本の作曲家第一号である瀧廉太郎の声楽曲43作品と2曲のピアノ独奏曲「メヌエット」「憾」が掲載されている。これらの全体的な傾向を探るため、音楽各側面から整理したものが以下の一覧表である。

### 1-1 分析一覧

年代	曲名	作詞者	音階	拍子	旋律線	形式	その他
M. 30	日本男児	東郊(作歌) 樋口喇叭卒(第1節) 原田重吉(第2節) 松崎大尉(第3節)	ト調	2/4	跳 3, 4, 5度の 跳躍	6l 24m	弱起。活発な軍歌調で、歌詞の内容から日清戦争後創作。瀧が雑誌に発表した最初の曲。付点リズムで独特の勇壮感を打ち出している。
"	春の海	東くめ	ハ長	3/4	順 一部4度	6l 14m	弱起。上真行先生選として数字音符で発表。明治唱歌のジャンルの主流の自然讃歌に属す。
"	散歩	中村秋香	ト長	4/4	跳	3l 11m	軽快なリズム。鼻歌気分のように装飾音が入れている。テンゴ表示アレグレット。
"	命をすてゝ	未詳	変口	4/4	跳 一部順	aa' ba' 4l 16m	数字譜で書かれた戦死者追悼の曲。弱起。数字譜には誤って変口調と書かれた。旋律的短音階が使われている。実際にはト短調。
M. 32	我神州	砂沢丙喜治	ト長	2/4	跳	8l 32m	「日本男児」に8小節加えて変化を与えた。冒頭楽節の旋律を再現させることで芸術上の完成度で完結した。
"	四季の瀧	東くめ	ニ短	4/4	跳	abcb 4l 20m	旋律を2声にし、分散和音の伴奏を付した。歌唱部とまったく異なった独立した伴奏。従来の伴奏は歌唱部をそのままなぞるか、和音を支えに提供するスタイルだったので画期的。調子、リズム形式など荒城の月と似ている。2小節ずつの前奏、後奏。
	友の墓	ジルヘル作曲 小松松風	ハ短	4/4	跳 一部順	5l 18m	弱起。ドイツの作曲家ジルヘルの曲に瀧が和声をつけた。最後にフェルマータ。
	尽せや	シュワーベン民謡 中村秋香	ト長	2/4	順 一部跳	aa' bb' 6l	弱起。ドイツ・シュワーベン地方の民謡を瀧が編曲。ダカーボとフィーネ。
	勇兵	ホルネマン作曲 中村秋香	ト長	4/4	跳 分散和音	aa' ba" 4l	弱起。デンマークの作曲家ホルネマンの「勇敢なる兵士」を編曲。マーチとしてリズムを強めるため原稿に修正した跡が見られる。勇壮な付点リズム前奏。
	無常	ジルヘル作曲 中村秋香	変口長	4/4	順中心	5l 11m	弱起。瀧の伴奏はオーソドックスなハーモニーが使われている。重唱の原曲を単旋律に変え、前奏に葬送リズム。
	春の野	アルント作曲? 中村秋香	ホ長	4/4	跳 オクターブ多い	aa' bb' 4l 14m	弱起。原稿の伴奏は多くの音が消されたり修正の跡がある。アルントは元々詩人なので曲は瀧の作ともいわれている。4分音符連続の伴奏。
	懐友	リラ作曲 東くめ	イ長	6/8	跳	abb' 3l 12m	弱起。分散和音による伴奏がつけられた。寄せては返す波を表現したのではないか。
	獵夫	作曲者不明 東くめ	ホ長	6/8	跳	aa' ba' 4l 17m	後半にドッペルドミナント。フェルマータ。
	夕立	作曲者不明 東くめ	ト長	6/8	順中心 1部3度	abca' 4l 16m	原曲はDas Gewitter。瀧は夕立と雷雨と2つの題をつけた。弱起。古典的なハーモニーをつけている。
	朧月	作曲者未詳 作歌者未詳	ヘ長	4/4	跳	aba' 3l 12m	弱起。瀧の編曲。3連符による伴奏はスケッチ段階のものとみられる。分散和音の単純な伴奏。
	春	作曲者不明 作歌者未詳	ホ長	6/8	跳	4l 18m	原稿はスケッチの段階。伴奏つき。3度の和音が多い2声。16分音符の連続和音の伴奏。
M. 33 組歌「四季」	花	武島又次郎	イ長	2/4	跳多い 音域広い	3節 それぞれ4l A-B2部形式 63m	芸術的日本歌曲・邦人作合唱曲の第1号。フレーズごとに音を少しずつ変えているが、当時の人には難しかったであろう。第3節第4行は半音ずつの上昇で減七の和音を使用。原稿では「花盛り」。

## 我が国における子どもの歌の多様性について

"	納涼	東くめ	イ長	6/8	跳 音域広い	3部 それぞれがaa' ba' 53m	中間部、同主調に転調。声部は弱起で始まる。原稿では「海辺の納涼」。8分の6拍子は、海辺の波の情景をモチーフ。フェルマータ後、テンポを落とし短調となり、夕方の海辺の情景が素晴らしく表現されている。
"	月	瀧廉太郎	ハ短	6/8	順 一部6度	aa' bb' cc' 71 26m	無伴奏混声4部合唱。秋にあたる適当な詩がみつからないので瀧自身が詩を書いた。どこか無常観を感じさせる瀧の詩は秀逸。最後「こえのかなしき」には物哀しさの感情が込められている。フェルマータでピカルディの3度が用いられる。
"	雪	中村秋香	変ホ長	4/4	跳	3部 27m	混声四部合唱にピアノとオルガンの伴奏。第3部、オルガンは長い全音符の和音を、ピアノは和声のアルペジオを奏で壮大に終わる。教会で歌われるドイツの宗教曲のような荘厳さがでている。作詞の中村は日本の神を思い作詞したのでろうが、瀧はキリスト教、創造の神を考えているのではないか。中間部はセクヴェンツ反復進行の技法で各声部を表現している。
M. 34 「中学唱歌」	荒城の月	土井晩翠	ロ短 (一部ヨナヌキ)	4/4	跳 一部順	4部 aa' ba' 41 8m	日本語の韻律やアクセントを殺すことなくかつ美しい旋律を伴っている。「花の宴」の「え」が井を削った楽譜もあるが、山田耕筰が編曲した時の改訂といわれる。その後ベルギーで讃美歌になった。
"	箱根八里	鳥居忱	ヨナ長	4/4	跳	91 32m	ピョソコ節。漢文調の変化に富んだ詩に通常の歌曲のような統一的なメロディーを設定せず、歌詞の変化に応じてその都度新しいメロディーを接続。軍歌調。一つの音に多数の言葉が入る
"	豊太閤	作詞者未詳	ホ長	4/4	跳	abac 3部とコーダ 33m	21歳の頃に「箱根八里」「荒城の月」とともに中学唱歌に入選。「豊太閤」だけはポピュラリティは得られなかった。音楽的にはリタルダンドやフェルマータを使い西洋音楽の作風が浸透してきたといえる。最後に9小節コーダを置き、単純な唱歌を超え出る歌曲を創造しようと意気込みがみられる。
M. 34 「幼稚園唱歌」	ほうほけきよ	瀧廉太郎	ヘ長	2/4	跳	71 32m	詞は堅苦しい文語体で書かれることが普通だった当時、口語で書かれたこの曲集は、画期的な幼児音楽だった。問と答の掛け合いになっている。
"	ひばりはうたひ	東くめ	ヨナ長	4/4	跳	aba 61 24m	IとVのコード中心の伴奏。途中ドッペルドミナントも用いられる。
"	鯉幟	東くめ	ヨナ長	2/4	順	aa' ba' 41 16m	伴奏をつけた唱歌集は初。簡単だが画期的なものだった。覚えやすいメロディー。
"	海のうへ	東くめ	ヨナ長	2/4	跳	51 20m	4, 5度の跳躍が多い。IとVの和音にドッペルドミナントを加え変化をつけている。
"	桃太郎	瀧廉太郎	ヨナ長	2/4	跳	41 16m	シンプルな旋律に、シンプルなマーチ調の伴奏が付けられている。瀧自身の作詞。
"	お池の蛙	東くめ	ヨナ長	2/4	跳	21 8m	短い曲の中にもドッペルドミナントを起用。蛙の鳴き声「くわっくわっ」がユーモラス。8分音符で鳴き声を表現。
"	夕立	東くめ	ヨナ長	2/4	跳	abab 41 16m	同じメロディーの繰り返しで当時の子供たちに平易で歌いやすい。メロディーは主音ではなく5音で終止。
"	かちかち山	東くめ	ヨナ長	2/4	跳	abac 41 16m	IとIVコード中心。愉快なお話をピョソコ節で表現。
"	水あそび	東くめ	ヨナ長	2/4	順	31 12m	Iフレーズは上行、2フレーズ下降、3フレーズ上行。「みずをたくさんくんできて」東京語のアクセント。
"	鳩ぼっぼ	東くめ	ヨナ長	4/4	跳	61 12m	日本で初めて口語体で童謡「鳩ぼっぼ」を東くめが作詞。鳩ぼっぼという単語はこの歌から生まれた。

"	菊	東くめ	ヨナ長 (シ1回経過音)	4/4	跳 中間部順	aa' ba" 4l 16m	簡単な分散和音の伴奏。愛らしい美しい曲。
"	雁	瀧廉太郎	ヨナ長	4/4	順 一部3, 4度	aa' ba' 4l 16m	1音1字で菊と同じように簡単な分散和音伴奏。
"	軍ごっこ	東くめ	ヨナ長	4/4	跳	aa' bc 4l 16m	力強い4, 5度の跳躍。伴奏に付点リズムを用いマーチ風。「すすめ」でドッペルドミナントのVIIを用い前進の様子をうまく表現している。
"	雀	佐佐木信綱	ヨナ長	2/4	跳 一部順	4l 16m	単純なメロディーとハーモニー。「少年世界」に載っていた詩を瀧が気に入り曲をつけた。
"	雪やこんこん	東くめ	ヨナ長 (ファ1回)	2/4	跳	aba' b' 4l 16m	I IV Vのコード伴奏。擬音語のこんこんが子供達に冬の楽しみである雪だるま作りをやってみたい気持ちを掻き立てている。
"	お正月	東くめ	ヨナ長	4/4	順 1部3度	aba' 3l 12m	1音1字。現在でも良く歌われる。子供たちのわくわくする気持ちが、素直でわかりやすい詩と親しみやすいメロディーに表現されている。
"	さよなら	東くめ	ヨナ長	4/4	順 一部3, 4, 6度跳躍	abab' c 4lとコーダ 20m	4フレーズの後に先生へのご挨拶が入っており、子どもらしく愛らしい。ほとんどが中音域の順次に幼児に歌いやすい。
M. 35	荒磯	徳川光圀	イ短	6/8	跳	3l 21m	転調の技法を巧みに使い広い音域に抒情的な内容を表現。シューベルトの作品を思わせ、伴奏も変化に富み、ドイツ留学の成果をうかがわせる。水戸光圀による和歌の格調の高さに負けない切々とした悲憤慷慨に満ちた曲。
"	別れの歌	作歌者未詳	ホ短	4/4	跳 一部順	5l 20m	混声4部合唱。弱起。横浜港に帰着の約14日後に作曲。内声部も哀愁帯びた動きが感じられる。「水のゆくえ」「荒磯」と、ひと月の間に3曲を作曲し、結核のため衰弱しながらも、創作意欲はふつふつと滾(たぎ)っていたのだろう。微妙なデュナーミクを伴っての4声が、夢とうつつの区別も定からぬ心境。
"	水のゆくえ	作歌者未詳	ニ短	4/4	跳 4, 5度の跳躍	43m	3声部の重唱。晩年の作品らしく、荒涼とした雰囲気の中にほの暗い情熱が込められている。伴奏8分音符連打は水の流れを象徴的に表している。分散和音の単純な、しかし不思議な響きの上行の動きで、ピカルディー3度によって終わる。

注) : 表中の曲名の太字は外国曲や作曲者未詳で、瀧により編曲されたものである。

その他の太字は海老沢氏のコメントである。

: 音階の欄の、ヨナ長=ヨナ抜き長音階、長=長音階、短=短音階、

: 旋律線の欄の、順=順次進行、跳=跳躍進行

: 形式の欄の、1=詩かフレーズの数、m=小節

## 1-2 編曲

外国人の作曲=6曲、作曲者未詳=4曲

瀧は声楽曲43作品のうち10曲を他の作曲家の作品の編曲という形で残している。外国曲や民謡では瀧が伴奏部を加える編曲が行われ、それは瀧廉太郎の作曲人生の初期にあたるものが多い。明治29年から32年の専修部や研究科の時代に行われた演奏会に、瀧はピアノ独奏以外にも唱歌の合唱メンバーとして出演している。それらの合唱曲はシューマン、ハイドン、ブラームス、モーツァル

トやウェーバー作曲のものを訳詩で歌われた。たとえ訳詩によるものでも瀧は外国曲に大きな関心をもったであろう。そこから編曲を試みることで音楽家としての、また将来の作曲家として創作意欲がわいたのではないだろうか。当時の音楽学校には作曲専攻は置かれていなかった。ピアノ専攻に籍を置いた瀧は、さまざまな教科を履修しながらピアノを演奏研究することで作曲技法を学んでいったのではないだろうか。

### 1-3 作詞者等

東くめ=19曲, 中村秋香=6曲, 瀧廉太郎=4曲, その他=8曲, 未詳=6曲

分析表で目に付くのが東くめである。東は東京音楽学校で瀧の2年先輩であった。教育学者の夫の提案で、「子供の言葉による、子供が喜ぶ童謡」の作詞を始め、日本で初めて口語による童謡を作詞した人物として知られる。東くめの作った歌詞には多くの擬音がまこと効果的に取り込まれている。瀧の曲作りに生気を与え、幼い子に馴染みやすい感覚的な音を生み出している。<sup>4)</sup> 分析その他の8曲の中には『花』の作詞者武島羽衣、島崎藤村と並ぶ大家の土井晩翠(『荒城の月』)など著名人も並ぶ。

### 1-4 音階

長音階=18曲, 短音階=8曲, ヨナ抜き長音階=17曲

音階については厳密に仕分けすると判断が難しいものもあるが「荒城の月」は一部ヨナ抜きではあるが短音階に分類した。我が国の声楽曲にヨナ抜き長音階が多いことは明治初期の唱歌を扱った前稿で述べた。我が国のわらべうたや民謡の多くが、レミソラドの5音で構成されていることから、中心となる音は異なるものの、ドレミソラという同じ構成音でできた歌が選択されたと考えられる。これらの歌をサンプルとして、ヨナ抜き長音階の歌が作り出され、今日までその傾向は続き続け、一つの側面を形成している。<sup>5)</sup>

### 1-5 拍子

2拍子系: 2/4=14曲

3拍子系: 3/4=1曲, 6/8=7曲

4拍子系: 4/4=21曲

全体の2拍子系, 4拍子系が大半を占めているが, 3拍子系も明治初期からすると増えてきている。前稿は明治11年から33年の22年間に10曲だったが, 瀧の声楽曲だけでも8曲を数える。明治初期の日本人には取りにくいとされた3拍子のリズムが西洋音楽の受容となって融合してきているのではないか。

### 1-6 旋律線

順次進行=9曲, 跳躍進行=34曲

曲によっては一部順次進行や一部跳躍を含んでいる

が, 大半の作品が跳躍進行を占めている。前稿明治初期の作品では大半が歌いやすいとされていた順次進行であった。明治30年ごろからフレーズ内での跳躍を含んでいる曲が散見され, 年代を追うごとに跳躍中心の曲が増えてきている。

### 1-7 形式

わずか8小節の「荒城の月」から63小節もの「花」まで, 独唱, 重唱, 合唱と様々な形態の歌曲, 唱歌を残している。「花」は瀧の初めての通作歌曲である。それ以前のもは有節歌曲であった。通作歌曲形式とは, ひとつの旋律を何度も繰り返して2節, 3節の歌詞を付けるのではなく, 歌詞が進むごとに異なる旋律をつけていく形式である。歌詞の持つ物語の起伏を明確に示すことができる。西洋では典型的芸術歌曲形式としてシューベルト以来定着していた。歌詞1節から3節までそれぞれ重唱や独唱での歌い分け, 間奏の変化など工夫がこなされ『日本の春のいきいきとした情緒』が西洋的形式でかもし出されている。

## 2 明治の唱歌の現状

前稿では『日本の唱歌 [上]』より明治11年~33年(瀧廉太郎まで)に掲載されている順に分析した。明治の西洋音楽黎明きにおける代表的な音楽家, 瀧廉太郎。その生涯と, 瀧が作品を掲載した曲集といくつかの代表曲を挙げ検討してみる。

### 2-1 瀧廉太郎について

明治12年, 瀧が東京に生まれた年は音楽取調掛設立の年でもある。父・吉弘は大蔵省に勤務後, 内務省に転じ中央の官吏として務めた後, 地方官として横浜, 富山, 大分と移り住んだため, 瀧も生後間もなくから各地を回ることとなった。明治27年は瀧にとって大きな転機となる。15歳で上京し高等師範学校附属音楽学校予科に入学し, その後本科, 研究科へと進む。そこで瀧は洋琴すなわちピアノを主専攻に音楽論, 和声学, 加えて対位法などを学びトップクラスの成績を残している。あわせて声楽, 合唱の勉強にも励み, それが声楽曲作曲の原動力になったことは疑いない。この時代, 音楽を学ぶに最

も重要視されているのが唱歌であった。前稿でも扱った『小学唱歌集』を教材に斉唱、合唱、発声法、芸術歌曲などを学んでいった。瀧の在学中には日清戦争がおこり音楽の世界でも軍歌の影響が著しくなっていたことは当然の現象であった。東郊の作歌による軍歌調のテキスト『日本男児』に作曲を試み、それは跳躍音程、附点リズムが入る、軍国日本の時代を反映した瀧のデビュー作となった。こうして彼は作曲家としての道を歩み始めた。明治33年には現在の千代田区にあった博愛教会で瀧はキリスト教洗礼を受けている。留学を命じられ翌年に出航するまでの短期間ではあるが、礼拝ではオルガンを弾いていた。<sup>6)</sup> 明治34年、日本最初の男子音楽留学生として日本国からドイツ・ライプツィヒ市に派遣された。(女性としては幸田延、幸田幸がベルリン等に留学している。)初めての男子留学生とあって、音楽教育界からかなりの注目を集めていたのは疑う余地は無い。嘱望を受けながら留学した瀧は、留学中に結核におかされ、翌35年に帰国することになる。帰国後は大分で療養後、36年6月29日、23歳の短い生涯を閉じた。死の4ヶ月ほど前のピアノ独奏曲「憾」が瀧の絶筆となった。

## 2-2 唱歌集

『組歌 四季』 明治34年14ページの曲集が刊行された。「花」「納涼」「月」「雪」の4曲からなる声楽曲の楽譜である。冒頭で当時の歌曲創作の現況やこの曲集に託した自信と抱負を語っている。この曲集の創作は西洋音楽が入って間もない日本でのことを考えると、驚嘆の思いを抱かざるを得ない。

『中学唱歌』 明治34年出版。中学校における音楽教育の必要性を巡り、文学者や音楽家の衆知を集め編集をおこなった。公募の形で瀧の『荒城の月』『箱根八里』『豊太閤』の3曲が入選する。外国曲がほとんど入っておらず、日本人作曲家による曲を集めたことは、日本人作曲家の自負があったのではないだろうか。

『幼稚園唱歌』 瀧自信が編集した幼児向けの唱歌集で明治34年刊行された。当時の子供向け唱歌の歌詞は難解なものも多く、瀧はその標準をまさに幼稚園児の年齢に定め、しかも彼ら(児童)が「日常見聞きする風物童話等」に主題を取り<sup>7)</sup> 編集をおこなったであろう。ゆったりしたものより速めのテンポで、遊戯を入れやすくしたの

ではと考えられる。そしてもう一つの特徴は全曲にピアノ(またはオルガン)伴奏をつけたことであった。それまでの唱歌集は無伴奏であり、簡単な伴奏ではあるが画期的なことであった。瀧はこの伴奏に関し「興味を助けん為」と、あくまでも習熟後に子供達を伴奏付で歌わせるものと役割を記している。この曲集から瀧が幼児音楽にすぐれた見識を持っていたことがわかるであろう。

## 2-3 代表曲

『花』 組歌四季の第1曲目であり、日本の芸術歌曲第1号といわれる。4小節のピアノ前奏は、左手のオクターブによる音の動きの上に、右手の16分音符による軽やかな動きで、春のうきうきした気持ちを表しているかのようだ。第1節は重唱、第2節は独唱による歌い分け、第3節は再び重唱と工夫が凝らされている。こういった点からも日本の情緒が西洋音楽の芸術歌曲形式と一体となった最高の日本歌曲第1号と位置づけられるといわれる所以であろう。

『箱根八里』 付点のリズムの軍歌調で始まる32小節もの長大な曲は、楽曲構造の多様さと軍歌では考えられない芸術性が感じられる。シンコペーションのリズム、3連符、急速な細かい音符、4分音符による自然描写など、瀧の楽才が余すところ無く発揮されているのではないか。

『荒城の月』 現在良く知られている楽譜一花の宴のシャープを削り、原曲の8分音符を4分音符に変え4/4拍子にした。またピアノ伴奏をつけ短調を二短調に、テンポ表示をアンダンテからレント・ドロローソ・エ・カンタービレに変更—は山田耕筰である。原曲は単旋律無伴奏で中学唱歌に掲載された。瀧の譜面を見る限りでは2小節単位の単純な構造であり素朴さを感じる。しかしそこには単純素朴極まりない旋律の動きと楽曲構造が、短調という情緒表現手段に支えられている。<sup>8)</sup> 運命の悲しさや日本の自然を短調が表現している。

## おわりに

明治期を代表する作曲、瀧廉太郎の「声楽曲」「子どもの歌」について見てきた。西洋音楽を受容し、日本語のメロディーと曲節と調和し、全く独自の瀧による質の高い音楽であることが確認できる。分析表からも日本古

来からある陽旋法や陰旋法の影響を受けているヨナ抜き音階を使って作曲された曲も多いことがわかった。西洋音楽を吸収し、洋楽の故郷ドイツに渡り学んだ瀧も、日本人の心を西洋音楽により表現することを忘れていなかったのではないだろうか。芸術性ある歌曲の誕生と、西洋音楽のいっそうの融合で、楽曲構造の多様化がどのように推移していくか、今回は瀧と同時代の作曲家の「子どもの歌」、明治中期以降の作品について検討していく。

### 注) 及び引用文献

- 1) 海老沢敏：『瀧 廉太郎－夭折の響き－』岩波新書 (2004), pp. 68-69
- 2) 金田一春彦, 安西愛子編：『日本の唱歌[上]明治篇』講談社 (2006), p. 5
- 3) 小長久子編『瀧廉太郎全曲集[作品と解説]』音楽之友社 (2007)
- 4) 海老沢敏：前掲書 1), p. 178
- 5) 有道惇, 津上崇：『我が国における子どもの歌の多様性について－明治時代からの変遷 (1)－』中国学園紀要 第6号 (2007), p.189
- 6) 大塚野百合：『賛美歌・唱歌ものがたり』創元社 (2002), p. 8
- 7) 海老沢敏：前掲書 1), p. 175
- 8) 海老沢敏：前掲書 1), p. 168

